平成15年度厚生労働科学研究
（子ども家庭総合研究事業）
報告書（第４／11）

20030307 主任研究者　板　橋　家頭夫
（育児不安の軽減に向けた低出生体重児の栄養のあり方に関する研究）

20030308 主任研究者　渡　部　信　一
（インターネット及び人的ネットワークを活用した育児不安軽減に関する研究）

20030315 主任研究者　坂　上　正　道
（乳幼児突然死症候群の診断のためのガイドライン作成およびその予防と発症率軽減に関する研究）

20030316 主任研究者　小　林　正　子
（乳幼児から思春期まで一貫した子どもの健康管理のための母子手帳の活用に関する研究）

20030317 主任研究者　高　村　寿　子
（ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究）

厚生労働科学研究
（子ども家庭総合研究事業）

ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究

平成15年度研究報告書

平成16年３月

主任研究者　　高　村　寿　子

<目　次>

Ⅰ．総括研究報告

ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究

主任研究者　高村寿子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・468

Ⅱ．分担研究報告

1．ピアカウンセラー養成者(指導者)養成マニュアル作成に関する研究

分担研究者　高村寿子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・473

研究協力者　前田ひとみ

石田登紀子

管野クニ

羽入雪子

江角伸吾

・思春期ピアカウンセラーが得たピアカウンセリング活動の意義と活動の支えに関する研究

研究協力者　佐々木明子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・529

研究協力者　篠崎悦子

研究協力者　森田久美子

2．ピアカウンセラー養成マニュアル作成に関する研究

分担研究者　堀内成子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・536

研究協力者　竹内千恵子

研究協力者　渡辺純一

研究協力者　小陽美紀

研究協力者　高村寿子

3．関係機関との連携によるピアカウンセリングの立ち上げと効果的普及に関する研究

1）関係機関との連携によるピアカウンセリングの立ち上げと効果的普及に関する研究(栃木県編)

分担研究者　小林雅與　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・560

研究協力者　矢板橋チヅ子

研究協力者　荒井浩己

2）関係機関との連携によるピアカウンセリングの立ち上げと効果的普及に関する研究(高知県編)

分担研究者　家保英隆　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・575

研究協力者　渡邊麗子

研究協力者　光本朱實

3) 各都道府県・市および大学・民間団体におけるピアカウンセリング立ち上げに関する事例集

(1) 県主管課立ち上げ事例

・宮崎県におけるピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・・・・・・ 586

・佐賀県におけるピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・・・・・ 590

・鹿児島県におけるピアカウンセリング推進事業の取り組み ・・・・・・・・・ 594

(2) 県出先機関立ち上げ事例

・秋田県におけるピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・・・・・・ 601

・ピアカウンセリング手法による健康教育（性教育）に関する取り組み(岩手県) 606

・山形県置賜地域における思春期ピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・ 609

・福島県のピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・ 614

・長野保健所におけるピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・・・ 621

(3) 市町村立ち上げ事例

・防府市(山口県)におけるピアカウンセリング事業の取り組み ・・・・・・・・ 626

(4) 県立大学立ち上げ事例

・看護大学におけるピアサークル活動としての取り組み ・・・・・・・・・・・ 633

(5) 民間団体立ち上げ事例

・民間団体（とちぎ思春期研究会）のピアカウンセリング事業の取り組み ・・ 637

4. ピアカウンセリングの評価およびその効果的普及に関する研究

分担研究者 中村好一 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 657

小田林宏至

篠澤倪子

渡邉 至

5. ピアカウンセリングの国際的動向に関する研究

分担研究者 飯島愛子 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 664

浅村里紗

Ⅲ. 総合報告書

ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究

主任研究者 高村寿子 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 681

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
総括研究報告書

ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究（１４０７０４０１）

主任研究者　高村　寿子　自治医科大学看護学部　教授

研究要旨

平成 14 年度に引き続き、健やか親子 21 の 4 本柱の一本である、思春期保健対策の強化および健康教育の推進方策の具体的な取り組みの方法として、仲間：ピアによる性＝生の自己決定能力を育てるピアカウンセリング手法が、全国各地で円滑かつ効果的に実施できるためのマニュアル作成と効果的普及を図ることを目的に研究を実施した。

研究班は、１．ピアカウンセリング指導者（養成者）養成マニュアル作成班、２．ピカウンセラー養成マニュアル作成班、３．関連機関との連携によるピアカウンセリング立ち上げと効果的普及に関する研究班（学校保健との連携班および保健行政内での連携班）、４．ピアカウンセリングの評価および効果的普及に関する研究班、５．ピアカウンセリングの国際的動向に関する研究班の５班で研究を行なった。各班で今後の普及・定着のための課題は残されたものの、初期の目的は達成できた。今後、本研究班で作成されたマニュアルに沿ったピアカウンセラー養成およびピアカウンセラー養成者（指導者）の養成やエンパワーメントの持続、さらには教材の開発などにより一定水準の養成レベルを保ちながら円滑に広く普及させるためには、組織的に取り組む必要がある。そこで現在、養成や認定などに関わる組織団体として、仮称　ピアカウンセリング研究所の設立を検討中である。

以下、それぞれの分担研究について、本年度での研究成果を報告する。

分担研究者

堀内成子　聖路加看護大学　教授
小林雅興　栃木県安足健康福祉センタ所長
家保英隆　高知県健康福祉部医療対策課長
中村好一　自治医科大学　教授
飯島愛子　家族計画国際協力財団人材養成部長

A．研究目的

思春期保健対策の強化および健康教育の具体的な取り組みの方法の一つに、仲間：ピアによる性＝生の自己決定能力を育てるピアカウンセリング手法がある。

その手法が一定水準のもとに全国各地で円滑かつ効果的に実施できるためのマニュアル作成と，マニュアルを基盤に効果的普及を図ることを目的としている。

B．研究方法

研究班は基本的には５班（３の連携立ち上げ班は、学校保健と連携する班と、保健行政内での連携班としたので６班構成）に分かれ、研究課題に取り組んだ。同時に、班全体の目的であるマニュアル作成のための研究成果の共有が必須であるので、全体班会議で調整･統合を図った。

以下、今年度平成１５年度の研究班別の研究成果を総括する。詳細は各班の分担研究報告書に掲載した。

（研究全体への倫理面への配慮）

昨年同様に、ピアカウンセリング事業

の立ち上げに関して、当該自治体の了解を得た。また、ピアカウンセリング指導者およびピアカウンセラー養成セミナー受講者には、本研究の趣旨を明らかにし（インフォームドコンセント）受講の有無を決定していただいた。

また、ピアカウンセリング実施時の対象者である若者たち（高校生）に対しては、本研究の趣旨をピアカウンセリング受講募集時または開始前に伝え、かつ実施中の発言などに関しては個人名で公表しない（インフォームドコンセント）ことを尊守した。

さらに、ピアカウンセリング評価班ではとくに倫理面への配慮として、調査の内容は性に関するものであり、個人情報保護のため調査票はすべて自記式無記名とした。また、他人が回答内容を容易に見ることができないように調査票回収のための専用のワンタッチ式封筒を各調査対象者に配布した。さらに調査票表紙には本研究の目的と方法について記載し、回答を拒否する権利のあること（個人情報を提供しない自由を保証すること）を明記した。

C・D結果および考察

1．ピアカウンセリング指導者（養成者）養成マニュアル作成班

ピアカウンセラー養成者（指導者）養成のためのカリキュラムを作成し、モデルセミナーとして 35 時間のベーシックセミナーと 15 時間のホォローアップセミナーを開催した。その後、モデルセミナーの受講生がスーパーバイズを受けながらピアカウンセラーを養成したプロセスや、養成したピアカウンセラーのピアカウンセリングやピアエデュケーションの実践評価を通して、カリキュラムの修正を行った。その結果、ピアカウンセラー養成者（指導者）養成のためのベーシックセミナーモデルプログラム（45 時間）および、フォローアップセミナープログラム（15 時間）を完成させた。

ピアカウンセラー養成者（指導者）養成モデルセミナー受講者によるピアカウンセラー養成は、東北四県（秋田、岩手、山形、福島）、長野県（長野、佐久）、佐賀県、宮崎県、鹿児島県において行なわれた。

本研究班で作成されたマニュアルにそったピアカウンセラー養成者（指導者）、ピアカウンセラーの養成をより円滑に行ない、広く普及させるためには、組織的に取り組む必要がある。そこで、現在、養成や認定などに関わる組織団体として、仮称　ピアカウンセリング研究所の設立を検討中である。

2．ピアカウンセラー養成マニュアル作成班

平成 14 年度の受講生，および過去の調査からもニーズの高かったフォローアップセミナーカリキュラムを作成し、モデルセミナーを開催した。

その後、モデルセミナーの受講生が実際にピアカウンセリングやピアエデュケーションを行った活動実績や評価をもとに適宜カリキュラムの修正を行った。その結果、ピアカウンセラー養成ベーシックセミナーモデルプログラムおよび、フォローアップセミナープログラムを完成させた。最終的に、このベーシックセミナーカリキュラムは、鹿児島・佐賀・宮崎・秋田・岩手・山形・福島・長野県そして栃木県において試用され、その実践上の評価を得て、１部教育内容を洗練させた

3．関連機関との連携によるピアカウンセリング立ち上げと効果的普及に関する研究班

この班は２班にわかれ、栃木班は県教育委員会と連携してピアカウンセリングを立ち上げるマニュアルの作成班である。

栃木県では、１０歳代の者の人工妊娠中絶率の激増と高校生の性意識の問題に対応するため、ピアカウンセリング手法にいち早く着手し、県教育委員会と連携しながら、県内全高校生を対象にスタートした。平成１５年度では１４年度から開始した事業の見直し、特にピアカンセラーの候補者の養成に意見が分かれ、高

校生はピカウンセリング講座の受講側に回ったほうが効果的との声が大きく、１５年度は大学生年代に養成の枠を絞った。

また、養成事業委託先のとちぎ思春期研究会の主催で、約半年後にフォローアップ（ブラッシュアップ）セミナーを開催し、カウンセラーたちは積極的に再研修を受けていた。また、ピアカウンセリング受講者およびピアカウンセラーの保護者に対して調査を行なったところ、ピカウンセリングを好ましい方法と受け止めていることも示唆された。学校側に伝達の場を準備し始めている状況が伺われた。今後高校での活用の具体例を蓄積し、広く高校で活用する様に勧めることの必要性を感じる。また、とちぎ思春期研究会会員ピアカウンセラーとで連携をとりながら、思春期相談所クローバーピアルームを委託運営している。ピアカウンセラーもとちぎ思春期研究会員も共にボランティアの精神で動いているので、時にはスムースな運営に至らず試行錯誤しながら進めているが、クローバーピアルームの利用者は確実に増加している。これらに関しては栃木県の分担報告書の添付資料として掲載しているので参考にされたい。

反面、相談内容などの対応しきれないピアカウンセラーの出ていることからさらに検討していくことが求められている。ピカウンセラー養成事業は平成 14 年度から３年計画であるので、１７年度以降の取り組みと事業の定着のためには今までの成果を健やか親子の指標などともからみ合わせて評価するなど、民間問わず労を惜しまない努力が必要である。

他方は高知県で保健行政単独で立ち上げるマニュアル作成班である。

保健行政が主体となりピアカウンセリング活動を行う際には、ピアカウンセラー養成講座の内容自体に加えて、地域の理解を得るための科学的資料に基づいた事前準備(説明と広報)と養成したピアカウンセラーが活動を継続するための環境整備（定期的な活動機会の提供と拠点の確保）が重要であることが明らかとなった。特に、ピアカウンセラーは、進学や就職により生活基盤が大きく変動する時期にあり、養成後の活動継続策を当初から想定した取り組みが不可欠である。

４．ピアカウンセリング評価および効果的普及に関する研究班

高校生における性に関するピアカウンセリングの短期効果を評価するため、栃木県下の公立高校の「性に関するピアカウンセリング」受講者に対し、自記式無記名式のアンケート調査をピアカウンセリング受講前後に行った。人生計画の具体性の有無、避妊・性感染症に関する知識や意識、コンドーム使用に関する自信などについての問いで、男女とも好ましい方向に変化しており、ピアカウンセリング受講が知識以外にも性に関する意識や人生に対する考え方をはじめとした自己決定能力に関連する要因にも好影響を及ぼしている可能性を示した。

５．ピアカウンセリングの国際的動向に関する研究班

ピカウンセラー・ピアエデケーターの養成カリキュラムと養成者養成の国際的動向を収集・翻訳することに焦点を当てた。その後、本研究分班のピアカウンセラーおよびピアカウンセラー養成者養成のカリキュラム案と照合し、国際的見地からカリキュラムの整合性・妥当性を研究動議し、わが国におけるピアカウンセリング・ピアエデケーションの効果的普及を図るための方向性を確認した。

E．結論

１）先ずピアカウンセラー養成カリキュラムにはベーシック養成のみならず、その後の実践活動を経験しながら避けて通れないパワーレスなどの対応に、ピアカウンセラーへのフォローアップセミナーの必要性がわかった。その一連の追跡結果から；最終的なピアカウンセラー養成カリキュラム目的・時間数・教授方法などを検討し、フィックスした。その養成カリキュラムと連動しながら、モデル研

究「セミナーを実施し、ピアカウンセラー養成者（指導者）の養成カリキュラムをフィックスした。養成者（指導者）セミナーにも、ベーシック・フォローアップの両方が必須であることが分かった。

また、感性豊かに仲間たちに寄り添い、自己決定を支える能力あるピカウンセラーを養成するには、養成者自身が感性豊かに若者により添える資質が重要な鍵であることが分かったので、それを精査するための課題を研究精査した。従ってこの二つの養成カリキュラムおよび具体的な教授展開方法は連動することから、養成マニュアルとして合冊することとした、

さらにこの養成カリキュラムおよび教授展開方法を今後普及・定着させるには、国際的な裏づけが必要であったので、国際動向研究の成果との照合を研究討議した。将来にわたって普及・定着を期待していくには、すでにさまざまな文化・生活習慣など多様化した条件をクリアしたものが実存しており、それと照合することが、わが国でも流行ではない底辺まで根付くものを構築できると考えたからである。

2）ピカウンセラーの保護者に対する質問紙調査から、他領域を巻き込んで連携をとりながらピカウンセリングを立ち上げるための加速要因の一つに、ピアカウンセリングを肯定している保護者の協力も重要であることがわかった。

また、参加高校での参加高校生の活用状況が図られていたことを踏まえて、県をキーステーションとする立ち上げマニュアルを作成した。そこには受講生の自分を大切にする自尊感情や自分に対する自信度、性知識や考え方および行動に変化の状況から、評価方法も立ち上げマニュアルに挿入することが必須であることがわかった。

他方、他領域とくに教育委員会等と連携が早急に取り合えない場合、保健行政内の他部門などと連携しながら立ち上げることも緊急課題解決には重要であることもわかった。

2．マニュアルの構成

従って、マニュアルは以下の2部構成とする。

1部:ピアカウンセリング事業立ち上げマュアル（以下の3内容含む）

a.県を基盤とした立ち上げマニュアル（ピカウンセリング・コーディネイターの機能・役割を含む）

b.ピアカウンセリングの有効性の評価マニュアル

c.各都道府県・市・大学・民間団体それぞれから立ち上げている事例集

2部:ピアカウンセラー養成・ピアカウンセラー養成者（指導者）養成マニュアル

a.ピアカウンセラー養成者(指導者)養成マニュアル.

b.ピアカウンセラー養成マニュアル

D.今後の課題

マニュアル作成は今年度で終了するが残された課題として（1）マニュアルの都道府県への配布後の効果的普及、（2）ピアカウンセラー養成および養成者養成の水準を一定に保つための教材作成、（3）全国のピアカウンセラーや養成者のパワーレスの予防のための、仮称　ピアカウンセリング研究所および掲示板などで情報交換できるホームページの作成が関係者から希求されている。今後の研究が待たれるところである。

F.健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

(1)渡辺純一、堀内成子、小陽美紀、竹内千恵子、片桐麻州美、髙村寿子：ピアカウンセラー養成セミナー受講後フォローアップ評価、思春期学
VOL(22)1.167-174.2004.

2．学会発表

(1)渡辺純一、堀内成子、小陽美紀、江藤宏美、竹内千恵子、片桐麻州美、髙村寿

子：ピアカウンセラー養成セミナー受講後フォローアップ評価，第5回日本ヒューマン・ケア心理学会発表論文集，5 51-52, 2003
(2)渡邉至、中村好一、篠沢倪子、高村寿子：栃木県下の高校生の性に関する特性とピアカウンセリングニーズについて。第62回日本公衆衛生学会総会、2003.10.（日本公衆誌50（10）：591、2003）
（3）高村寿子、前田ひとみ、橋本充代：A New Strategy of Youth-to-Youth Education in Japan Ⅰ、第18回ヘルスプロモーション・健康教育世界会議、2004.4.メルボルン
（4）橋本充代、前田ひとみ、高村寿子：A New Strategy of Youth-to-Youth Education in JapanⅡ－Practical Model in T Prefecture－、第18回ヘルスプロモーション健康教育世界会議、2004.4.メルボルン
（5）篠沢倪子、高村寿子、矢板橋チヅ子：高校生のピアカウンセリングニーズと普及に関する課題．第7回日本地域看護学会学術集会、2004.6(p34-1),発表予定

H．知的所有権の取得状況

現地点なし

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

ピアカウンセラー養成者（指導者）養成マニュアル作成に関する研究

分担研究者　高村　寿子　自治医科大学看護学部

研究協力者　前田ひとみ　宮崎大学医学部看護学科

石田登紀子　福島県立医科大学看護学部

菅野　クニ　元福島相双保健福祉事務所

羽入　雪子　日本赤十字秋田短期大学

江角　伸吾　とちぎ思春期研究会若者部会

平成15年度は、ピアカウンセラー養成者（指導者）養成のためのカリキュラムを作成し、モデルセミナーとして35時間のベーシックセミナーと15時間のフォローアップセミナーを開催した。その後、モデルセミナーの受講生がスーパーバイズを受けながらピアカウンセラーを養成したプロセスや、養成したピアカウンセラーのピアカウンセリングやピアエデュケーションの実践評価を通して、カリキュラムの修正を行った。その結果、ピアカウンセラー養成者（指導者）養成のためのベーシックセミナーモデルプログラム（45時間）および、フォローアップセミナープログラム（15時間）を完成させた。

ピアカウンセラー養成者（指導者）養成モデルセミナー受講者によるピアカウンセラー養成は、東北四県（秋田、岩手、山形、福島）、長野県（長野、佐久）、佐賀県、宮崎県、鹿児島県において行なわれた。

本研究班で作成されたマニュアルにそったピアカウンセラー養成者（指導者）、ピアカウンセラーの養成をより円滑に行ない、広く普及させるためには、組織的に取り組む必要がある。そこで、現在、養成や認定などに関わる組織団体として、仮称　ピアカウンセリング研究所の設立を検討中である。

A．思春期ピアカウンセリング事業の展開にあたって

1．思春期ピアカウンセリングの必要性

子どもから大人への以降期である思春期／青年期は、二次性徴が顕著になり、心身に急激におこる性的成熟により、性意識・性欲求が高まって性的生活が活発化してくる。中学から高校、大学と学年が進むごとにセックスの相手が「複数化」して、性のカジュアル化現象という造語までつくられた。そして、十代の妊娠・中絶あるいは性感染症の問題は慢性化の一途にあり、その対策が今、学校現場の性教育や地域での思春期保健対策の緊急課題となっている。

さらに思春期／青年期は将来、自分が何になりたいか、自分の正体を見極める時期でもある。そして、男らしさ、女らしさにとらわれず社会の中でどう生きるかの視点による同性・異性との人間関係、性差と性役割の理解、両親や他の大人からの自立、社会的責任などの学習を通して、ジェンダーアイデンティティの確立を図ることが求められる。この過程が乗り越えられないと自分が何を求めているのかなかなか見いだせないで、宇宙をさまよっているような状態のアイデンティティの拡散を引き起こす。そして、何事にも無気力・無関心・無感動となり、登校拒否・拒食症・自殺願望、あるいは家庭内暴力・いじめ・若年売春・十代妊娠・中絶などの非社会的行動や、反社会的行動へと発展していく場合もあり、とくに最近これらの諸問題の解決が長期化している。

将来の人生設計を構築していく思春期／青年期にある人々は、性的に成熟した男女が営む性交には妊娠や性感染症が常に表裏一体であることを理解し、望まない妊娠や性感染症

を予防するための避妊や感染予防を実践する力を身につけることが必要である。そして、自分自身の人生設計を見通してセックスをYes, Noと主体的に自己決定していく能力が必須である。自分にとって性交渉はまだ早いと考えるならば、Noとはっきり言えあえる関係、また、 Yesであるならば互いに人生設計の実現のために妊娠・出産・子育ては今、ＯＫなのか、性感染症のリスクはどうなのかを二人で話し合いできる対等な関係が基本である。その上で妊娠・避妊そして中絶、性感染症に関する正しい知識と興味本位にかりたてるマスコミなどからの不確かな性情報をよりわける力（メディア・リティラシィー）が必須である。

思春期の人々にとって最も重大な関心事である性＝セクシュアリテイは，セックス＝性交という一面的なとらえ方ではなく、この世にひとりしかいない自分をたいせつに、自分らしさを実現しながら人生を生きていくための基盤と認識を深めることである。思春期真っ只中のその時期に、それぞれの思春期を基盤に将来成熟した一人の人間として生きる力、つまり人生のゴールである豊かな人生を創造できる力を育てることであり、ヘルスプロモーションの柱でいえばその人自身の力や技術の向上を育てることが重要である。そのためには思春期保健の領域で取り組まれている健康教育・性教育の目的や方法を、見直す時期がきたことを認識しなければならない。単に思春期正しい知識を教えるだけではなく，将来の人生設計すなわちＱＯＬを実現していくために、例えばセックスをすることが今、Yes なのか No なのか、自分で決められる力【性＝生の自己決定能力】を育てることが欠かせない。

性＝生の自己決定能力を育む教育方法としては、一方的な価値観で構成された指導型の健康教育では限界があるのは自明の理である。当事者自身が主体となって行動変容をもたらす効果的な健康教育・性教育の方法の確立が急務となってきた。そのような背景の下に、親でもなく、教師でもなく、思春期の人々にとって最も身近に信頼できる存在であり、同世代に生きる価値観を共感・共有する“仲間”というキーパーソンが行うピアカウンセリング、訳して仲間カウンセリングという方法が注目を今、浴びている。この手法は思春期の人々の主体的な行動変容を支えるために非常に有効な方法であると、ＷＨＯを始め国際的レベルでは高い評価を得ている。

思春期の人々は家庭や学校の中だけでなく、もっと広い地域社会：コミュニティでさまざまな人々とかかわりあいながら生きていることを忘れてはいけない。だからこそ、思春期にかかわる多彩な関連機関が連携をとりあい、ヘルスプロモーションの柱である環境づくりが急務なのである。思春期のヘルスプロモーションは、家庭・地域・学校・医療・福祉などの関連機関がそれぞれの壁を低くし柔軟に連携してこそ、環境づくりの効果が最大限に発揮できるのである。

２．思春期ピアカウンセリングの意義

a.今、何故、ピアカウンセリングなのか？

従来行われてきた伝統的な健康教育は、一方交通の知識偏重型によるアプローチが主流であった。しかし、知識を提供するだけではその人が長年培ってきた日常生活習慣を変えるのは非常に困難であることが、さまざまな実践活動や研究結果から明確となっている。健康教育の最終的目標である主体的な行動変容をめぐって、種々な方法が試行錯誤の中で実践されてきた。冒頭でも述べたように、思春期の若者の性＝生の健康問題として、自尊感情の低下や、性交経験率の急増と経験の低

年齢化が大きな社会現象となり、その結果十代妊娠・人工妊娠中絶・性感染症などの諸問題が顕在化してきた。それらの問題解決のために若者自身が主体的に自己決定していく能力が必須であり、そのための発想の転換による健康教育・性教育のあり方を教授研究していく過程で、世界各国で広範囲に実践されているピカウンセリングという手法の存在を知ったことが、わが国における思春期ピアカウンセリングの出発であった。

b．わが国における思春期ピアカウンセリングの萌芽と健やか親子２１における方策

わが国における思春期ピアカウンセリングの第1回は、地域の社会公民館における試みであった。自治医科大学看護学生が人間の性を学ぶセミナーを受けて、学んだことを生かして自然発生的にキャンパスの中で行われていた性＝生に関するピアカウンセリングの状況を、ボランティア活動として地域活動を広げたことからスタートしたのである。その活動は次に思春期の人々を支える民間団体（とちぎ思春期研究会）で広がり始め、行政レベル（小山市）で、管内の5つの県立高校の生徒を対象に思春期ピアカウンセリング講座として実践されるようになった。そこから同じ栃木県の足利市・宇都宮市・栃木市などが取り組むようになってきた。さらにその状況は全国的広がりを見せるようになり、四国で高知、そして沖縄、九州地方で宮崎、東北地方で福島が先ず取り組み始めた。その後、全国的に取り組む都道府県が増え、資料1のような状況になっている。その中で、今後の立ち上げの参考になる事例を掲載してみた。

このような状況下、2000年12月に厚生労働省は、21世紀の母子保健の取り組みの方向性を提示し、2010年までの目標を設置し、関係者、関係機関・団体が一体となって推進する国民運動計画「健やか親子21」を提唱した。その４本年柱の一つに、思春期の保健対策の強化と健康教育の推進が掲げられ、その推進策の基本理念にヘルスプロモーションがおかれた。具体的な取り組みとして、思春期の健康と性の問題のアプローチに質的な転換を図ることが提言され、その中に同世代の仲間による取り組の有効性と推進が明記されたのである。思春期の若者には一人ひとりにその人なりの人生の坂道があり、その坂道のゴールに豊かな人生（ＱＯＬ）がある。そのゴールを目指して坂を登るのは、彼ら自身の自己決定能力にほかならない。その力が最大限に発揮できるような環境づくりが、私たち大人そして専門家に課せられた役割であることが、国の新たな活動の方向性と明記された。

ピアカウンセリングに対する我が国の医療や福祉領域の今までの解釈は、「同じ病気や障害を持っている者同志を仲間という」が主流であった。ここで紹介するピアつまり仲間とは、例え同じ病気や障害を持っていなくても、持っている人の人生の夢や希望、あるいは挫折感などを同じ目線で受けとめ、どうしたらよいか一緒に考えることができれば、ピアであるという、緩やかで広い意味を持つ。思春期の若者にとってはそれが強い意味を持つのである。思春期共通の発達課題を達成しようとしている仲間同志だという認識と、その相互作用は先ずは二人の間で生き生きと性＝生の情報を交換しあうことにより成立する。また、同世代の仲間からの批判されない共感・支持によって勇気や力が得られ、素直な心で態度や行動の変容が起こるのである。

他方、仲間からの影響には好ましい影響と好ましくない影響もある。例えば、“まだ、（セックスの）経験がないの！”と馬鹿にしたり、仲間外れにしたりするピア・プレッシャーがそれである。それらを排除し、かついたずらにマスコミによって煽情的に歪められ

て伝えられる性情報の代わりに正しい知識を得て、具体的な性にかかわる態度や行動を自分の人生設計を見通して意志決定できる能力、つまり性＝生の自己決定能力を自分で構築するために最も強い影響力を持つのが、ピアなのである。

思春期ピアカウンセリングの歴史をひもとくと、1972年頃の英国で若者たちの間に広まった仲間から仲間へ、ぶどうのつたがからまっていくようなグレープバイン（ぶどうの木）運動に端を発している。そしてその思想と活動は海を越えアメリカ大陸に伝搬し、1976年ミルウオーキー家族計画協会で実施された。その後アメリカ各地やカナダ、ラテンアメリカなど世界各地に広がりをみせはじめた。1977年ＷＨＯは“思春期の人びとのヘルスニーズ”という専門委員会報告書で、『革新的なアプローチは，同年輩の仲間同志のカウンセリング（Peer counseling）プログラムを開発することである』と強調している。思春期の人びとは権威に対して錯綜した感情があり、それは時としてサービスの供給を面倒にする。また、思春期初期には自尊心が損なわれる傾向があり，それは同年輩の仲間同志の効果的なカウンセリングプログラムによって回復し得ると述べている。それから14年たった1991年11月ＷＨＯは、“思春期の保健と発育への取り組み”会議を開催した際に、80ヵ国 401機関の政府・非政府機関へのアンケート結果を発表した。先ず個人カウンセリングが22％、身体的ならびに心理・社会的サービス21％、資料の作製・配付17％、職業技術の訓練と指導13％、そしてピアカウンセリング12％の割合で実施されているとのことである。

３．ピアカウンセリング事業の展開に向けて

a.実践展開の必要要件

若者たちが主役であるピアカウンセリングが全国各地で広く実践されるためには、保健師や助産師、養護教諭など、思春期保健や性教育にかかわる関係者の意識改革が先ず必須である。若者にとって最も影響力があるのは誰かを自覚し、主役を若者たちに委ね、彼らが力を十分に発揮できるようコーディネィターの役割が果たせる人が必要である。常に前面に出て教育指導してきたそのスタイルを払拭し、黒子に徹する意識改革が先ず必須である。そのためには「健やか親子２１」でも強調されているように、関連領域と積極的に連携をとりあわなければならず、各関連領域のネットワークが最大の力である。

次にピアカウンセラーの養成と確保が重要な鍵となる。カウンセラーは参加者と同程度の知識水準では効果がない。カウンセラーとして性に関する正しい知識の習得とピアカウンセリング・スキルの訓練を積むことが必須である。ピアカウンセラー養成者（指導者）には、ピアカウンセラーが、仲間と共感・共有しながら活動したいという主体的な意志を尊重して支えていくことと、それらの活動が自由にできる場を確保していくことが求められる。

そして学校＝成績＝受験というプレッシャーをとりはらい、親、先生、そして勉強…という緊張の枠組みから開放されて、のびのびと今、もっとも興味関心のある事柄を自分の本音を語れる場所を設定することが必須である。

ピアカウンセリングを形作るには多くの時間とスーパーバイズが必要である。また、諸外国の中には宗教や親の認識の違いにより性のとらえ方も異なり、わが国で行っているような学校や地域行政が組織だって性教育を展開することが困難な場合もある。そこで、ＮＧＯとくに家族計画協会がこれらの若者たち

の活動を支援している。

b.わが国における若者活動におけるピアカウンセリングとピアエデケーションの考え方

1．国際家族計画連盟（ＩＰＰＦ）での若者活動とピアエデケーション

思春期保健・性教育の領域に、若者をいち早く巻き込んで若者活動をしている国際家族計画連盟（以下、ＩＰＰＦ）における活動は、これらの活動をピアエデケーションと総称し、活動している若者たちをピアエデケーター（仲間教育者）と呼んでいる。

先ずＩＰＰＦの若者活動とくにピアエデケーションの定義、理由、使用用語の意味、および若者のリクルートについて紹介する。その上で、わが国における若者活動とくにピア：仲間というキーパーソンによる活動の発端とその手法として、ピアカウンセリングとピアエデケーションについて定義する。

ＩＰＰＦで医学技術部門研修スペシャリストをしているドーチェ・ブラーケンは、昨年平成１５年６月に開催された第１回思春期保健相談士学術集会の記念講演で、“ピアエデケーションとは同年代または所属を同じくするグルーが、情報や知識・価値観・スキル・行動を分かち合うことである”と定義している。そして、何故、若者にピアエデケーションが有効であるかについて、以下のように述べている。

① 安価である。（だが正式なトレーニング、スーパービジョン、評価を行うと、労働力·時間の両面で高価になる。）
② ピアの社会的なネットワークは若者の行動変容に重要な役割を果たしている。
③ 若者に重要な役割を演じる機会を与えることは、若者のスキル・知識の向上につながる。
④ 与える人間とそれを受けとる人間が近い立場にいることで、知識に説得力が増す。

また、若者活動を展開しているときに、頻繁に使用される言葉について以下のように言葉の意味の統一を図っている。

① ピカウンセリング：一対一で若者をサポートし、決断に導くこと
② ピアチュウターリング：若者をサポートできるよう若者を訓練すること
③ ピアメンタリング：ロールモデルとなるような、また、他の若者をガイドできるよう若者を訓練すること。
④ ピアサポート：若者がお互いに必要な情報を提供しあうこと
⑤ ピアコミュニケーター：若者の間での情報共有を促進する若者たち

さらに、世界各地でピアエデケーターを募り、訓練するが、募集にあたって以下のように配慮している。

① 自分が何を欲し、誰をどこで募りたいかを明確にする
② ジェンダーには特に気を使う
③ 様々なグループから若者を選ぶ
④ 個人的興味・そして若者の取り組みを意識する
⑤ 若者に取ってプアエデケーションがどのような利点をもたらすか、理解する。

実際にピアエデケーターを訓練する際に、

① 内容と方法論をエンパワーする
② どのようなスキルと知識が必要とされているか？
③ 若者の不安に触れている

を最優先として行なっているそうである。

ＩＰＰＦの若者に対する養成カリキュラムおよびトレーニングの方法は、国際的動向班

の分担研究報告書を参照されたい。

ＩＰＰＦは若者に限らずすべての人がリプロダクティブ・ヘルスを獲得できること、安全でない中絶を無くすこと、ジェンダー間の平等の達成と女性のエンパワーメントの推進を図ることなどを精力的に行なっている世界最大の民間団体である子とは周知のことである。その中でとくに若者の性意識や性行動に対する支援方法として、若者間でピア教育を実施するユース・プログラムが大きな特徴となっている。しかしながら国際的若者環境には政治的・経済的・宗教的さらには教育的格差の隔たりが大きすぎる。その隔たりの中で、若者のリプロダクティブ・ヘルスを平等に獲得するには、どのような視点が求められるのだろうか？で

思春期の若者が性＝生について無知なるがゆえに引き起こされる、十代妊娠・中絶、性感染症などの問題の予防や解決には、理念的には思想・哲学としての教育活動が必須と考えられる。だからこそＩＰＰＦは、思想としてのピアエデケーションを「同年代または所属を同じくするグルーが、情報や知識・価値観・スキル・行動を分かち合う」と定義し、若者活動を展開しているのではないかと考える。

２．わが国における若者活動とピアカウンセリングとピアエデケーションの考え方

わが国の若者を取り巻く大きな特徴は、小・中学校までの完全な義務教育制度、その後の高等学校進学や大学進学率から伺える教育水準の高さである。もちろん地域の格差はあると言われるものの、国全体として推し量ると教育水準の一定化は保たれていると考えられる。当然、性＝生の健康教育も教育体系の中に整備されている。

にもかかわらず若者の性＝生の問題行動が、何故、これほどまでに長期的に大きな社会問題になっているのだろうか？

若者の心理を理解し、真のニーズに沿った性=生の健康教育がなされているのだろうか？　若者が求める情報が彼ら自身に届くまでに途中で搾取されているのではないだろうか？　などど、若者に対するこれまでの性=生の健康教育の方法論を大きく見直さなければならない時期に来ている。

知識伝達を主とした指導型では主体的な行動変容はなかなか起りにくいという、健康教育の発想の転換が余儀なくされている昨今、前述したように若者の間に自然発生的に誕生し、いつのまにか若者たちの心に入り込んでいった健康教育手法が、本研究でマニュアルを作成し、全国展開を目指している思春期ピアカウンセリング・ピアエデケーションなのである。思想的かつ政策的に取り組んでいるＩＰＰＦの取り組み方とは、若干異なるわが国での立ち上がり方を先ずは理解していただきたい。その上で、わが国で思春期ピカウンセリング立ち上がっていった経緯とＩＰＰＦの定義を踏まえて、本研究では思春期ピアカウンセリングを以下のように定義する。

思春期ピアカウンセリング・ピアエデケーションとは、思春期のヘルスプロモーションの構図を踏まえて、若者が自分自身で人生のゴールを見つけ、それをいきいきと実現しようとしていく能力を育てる健康教育手法である。その能力とは、自分やパートナーの人生設計を壊さないように、性＝生に関する意識や行動を自分で決められる能力のことを言い、性＝生の自己決定能力と呼ぶ。

具体的には将来の人生設計を実現していくために、今、自分にとって最大の関心ごとである、性＝生に関する意識や行動例えばセックスをどうするか、人生設計を見通して自分やパートナーにとってまだ早いならば“しない”と決められ、それをパートナーに伝えら

れる力、また、“する”と決めたらその後どういうことが起こりうるかを考えられる力と、起こりうる妊娠・性感染症を予防できる力を育てるために、若者にとって心を開き最も信頼する仲間が行なう手法である。

若者の傍に寄り添って、共感・共有しながら、彼らの自己決定を支えるのがピアカウンセリングのマインドとスキルをトレーニングされたピアカウンセラーである。本手法におけるピアカウンセラーは講師ではなく、寄り添って支えるファシリティター（促進者）である。ピアカウンセラーに関する養成など詳細は、ピアカウンセラー養成マニュアル作成班の分担研究報告を参照されたい。

また、思春期ピカウンセリンが実践される状況（実際活動）には、対象者のニーズによって大きく二つの活動に分けられる。個別と集団である。個別はＩＰＰＦが用語統一で定義している、一対一による相談活動つまりカウンセリングである。もう一つの集団にも二通りがある。基本は６人ぐらいの小集団（中にピアカウンセラーが１・２名入る）ですすめるグループピアカウンセリングである。

あと一つはその基本小集団をいくつか集めて、生＝生に関して全員で正しい情報を得て一緒に考えながら、自己決定を学んでいく学習スタイル、称して思春期ピアカウンセリング講座である。

ピアカウンセリングと称される以外に地域や学校の状況によっては、ピアエデュケーションが求められることがある。例えば、○○高校の１学年の全クラスに、集会場で６０分、エイズについて話してくださいというようにである。正しい知識を普及して欲しい、教えて欲しいという依頼は、ピアエデケーションである。寄り添って共感・共有し、主体的な自己決定を支えていくには、時間や会場その他の条件が整っていないと有効ではない。正しい知識の普及・啓蒙という目的に限定して行なえば、この方法は若者にとって身近な信頼する仲間が教えてくれるので、興味・関心を持つことは疑いない。ただし、態度（意識）変容・行動変容まで目的とするには限界があることを、いや慰する方も依頼される方も承知しておくことが重要である。

そしてピアエデケーションでも極力、ピアカウンセリングマインドとスキルを用いながら行なうことが効果的である。同じ目の高さを持つピアとしてのマインドを忘れずにエデケーターとなることが重要である。ミニ教師にならないことである。つまり、ピアカウンセラーとしての知識とスキルをトレーニングされたピアは、誤った情報に振り回されている仲間に１対１あるいは対集団のピアカウンセリングを行い、性の問題に正しく対処できるよう、思春期の若者の自覚、意志決定や問題解決の能力を高める活動を行なう。可能な限り、単に知識やスキルを教えるピアエデュケーションではなく、仲間とディスカッションを行いながら、堅苦しくない雰囲気の中で重要な情報を仲間に普及啓蒙していく活動を行うことである。

B．ピアカウンセラー養成者（指導者）セミナーの開催

１．目的

思春期ピアカウンセラーを養成し、地域のピアカウンセリングコーディネータと連携してピアカウンセリング事業を展開できるピアカウンセラー養成者（指導者）を育成する。

２．対象者の受講条件

セミナー受講後、思春期ピアカウンセラーを養成することができ、かつ地域のピアカウンセリングコーディネータと連携してピアカ

ウンセリング事業を実践できる者で、３つの受講条件のうち、いずれか一つを満たしている者を対象とする。なお、受講条件の詳細については「C．ピアカウンセラー養成者（指導者）認定」の項の１．申請の手続きに記した。

３．ピアカウンセラー養成者（指導者）マニュアルにおけるカリキュラム編成

ａ．カリキュラムの特徴

本カリキュラムは、ベーシックセミナーとフォローアップセミナーの２つのセミナーを中心として構成する。

カリキュラムは「ピアカウンセリング事業の位置づけ・展開について」、「ピアカウンセリングに関する知識」、「セクシャリティについて」、「エンカウンターの基礎知識」から構成され、それぞれ目標は表１に示した。受講者が、これらをバランスよく統合させていく過程を通して、最終的には、若者の自己決定に寄り添える思春期ピアカウンセラーを養成できることを目指している。

研究班によるモデルセミナーの受講者の大半がベーシックセミナーを受講した半年以内には何らかの形で思春期ピアカウンセラーを養成していたことから、ベーシックセミナー終了後、約半年後にフォローアップセミナーを開催するというタイムスケジュールが望ましいと考えられる。

ｂ．カリキュラムの概要

ベーシックセミナーは、受講条件に合致する者を対象として、思春期の若者に寄り添いながらピアカウンセラーを養成することができる能力を身につけることを目的として、「ピアカウンセリング事業の位置づけについて」、「ピアカウンセリングに関する知識」、「セクシャリティについて」、「エンカウンターの基礎知識」の講義・演習を行う。

フォローアップセミナーでは、ベーシックセミナーで学んだことを活かして思春期ピアカウンセラーを養成した者に対して、養成上で生じた悩みや思いを、同じセミナーを受けた仲間同士で共有することによって、指導者自身のパワーレスを予防し、エンパワーメントを促進することを目的とする。また、思春期ピアカウンセリングの環境作りのために地域のコーディネータや支援者との連携についてのブラッシュアップを行い、ピアカウンセリングコーディネータと連携して、さらに充実した思春期ピアカウンセリングを展開できることを目指す。

ｃ．カリキュラムの内容

ベーシックセミナーでは、思春期ピアカウンセリングの基盤となっている知識やスキルについての基礎的レベルでの理解を促すことと、若者のセクシャリティ観を学ぶ内容とする。そして、フォローアップセミナーにおいては、思春期ピアカウンセラー養成や地域でのピアカウンセリング事業の体験を踏まえて、事業をより発展的に展開できる内容として位置づけている。

表２、３に、このカリキュラムモデルを具体化したセミナープログラムの全体像を示した。

ｄ．実施上の留意点

①日程

ゆとりをもってセミナーを開催するためには、ベーシックセミナーは４泊５日、フォローアップセミナーは１泊２日程度が望ましい。しかし、ベーシックセミナーの４泊５日については諸般の事情から一度に開催することは難しいことも考えられるため、さらに検討が必要である。また、都合によりこれより短縮した日程でセミナーを開催する場合には、セミナーとして規定されている以外の時間も有効に活用するような工夫（例えば、時間数と

内容の精査は必須であるが、実践活動などの読み替えや置き換えなどいわゆる単位互換性などの工夫）が将来必要である。

②会場

原則として宿泊施設を併設した施設であること、そして、コ・カウンセリング実習などしばしば施設の屋外で行う実習や演習も想定されるため、できれば、自然が色濃く残るような場所がふさわしいと思われる。

③講師・教材

講師は原則として仮称　ピアカウンセリング研究所に登録されているピアカウンセラー養成者（指導者）２名以上とする。この他、若者気質を理解しながら、セミナーの目的を達成していくためには、講師の中に仮称　ピアカウンセリング研究所に登録されている経験豊かな現役ピアカウンセラーを含むことは必至である。セミナーで使用する教材に関しては、共通した教材の使用が必要となると思われる。なお、これらの資料については、カウンセラー養成マニュアルに一括して掲載した。

d．参加人数

参加人数は20名を原則とする。講義形式を取る機会が少ない本セミナーの性格上、参加者人数が多いと、グループワーク、エンカウンターといったセッションを通しての関わりが十分に取れない可能性が高く、効果的なセミナーの運営を困難にすると思われる。

C．ピアカウンセラー養成者（指導者）認定と「仮称　ピカウンセリング研究所」の設立の必要性

冒頭でも述べたが、健やか親子21の新方策として、若者を巻き込んだ保健行政と学校保健が連携して行なうピアカウンセリング手法はますますニーズが高まってきている。そこに本研究成果として、ピアカウンセリング事業立ち上げやピアカウンセラー及び養成者（指導者）の養成マニュアルが刊行される。今まで試行錯誤で養成されていたピアカウンセラーや養成者が認められたカリキュラムで養成・認定されることによって、一定水準のピカウンセリング活動の維持されることになる。しかしながらいかに認められたカリキュラムで養成・認定されたピアカンセラーやピアカウンセラー養成者（指導者）およびピアカウンセリング・コーディネィターであろうと、実践活動を展開していくと時にはパワーレスとなる場合も起こりうることは否めない。そこで、本研究成果を基盤に今後ますますのピカウンセリングの普及・定着と、かかわる関係者のエンパワーメントの継続や、身近に相談者（スーパーバイザー）がいないときなどの相談できる場などの機能も果たす「仮称ピアカウンセリング研究所」を設立することとする。

具体的にどのような形態で設立・運営するか、本班のピアカウンセラー養成者（指導者）の養成・認定審査の手順で例示する。なお詳細は継続検討中であるが、平成16年7月ごろまでには設立を考慮中である。

１．申請手続き

ピアカウンセラー養成者（指導者）の認定を希望する者は、仮称　ピアカウンセリング研究所主催の「ピアカウンセラー養成者（指導者）養成セミナー」への受講が必要である。受講を申し込むと、事前学習課題と共に認定申請書類が送付されるので、申請書類に必要事項を記入の上、セミナー期間中に窓口に提出する。

なお、認定を申請できる者は、セミナー受講後、思春期ピアカウンセラーを養成することができ、かつ地域のピアカウンセリングコーディネータと連携してピアカウンセリング

事業を実践できる者で、３つの受講条件のうち、いずれか一つを満たしている者とする。

①思春期保健相談士の資格を有し、思春期保健セミナー上級コースでピアカウンセリングコースを修了した者

②教育機関でセクシャリティに関して教授・研究にたずさわっている者

③思春期を理解し、これまでにピアカウンセラーに寄り添いながら地域のピアカウンセリングコーディネータと連携して具体的なピアカウンセリング事業を実践している者

なお、ベーシックセミナーとフォローアップセミナーの両セミナーを通してピアカウンセラー養成者（指導者）としての修了書が授与されるので、原則として片方のみの受講は認められない。

２．認定審査

ａ．事前学習

養成者（指導者）セミナーの受講を希望する者は、ピアカウンセラー養成者（指導者）としての資質を把握するための事前課題をレポートにまとめ、セミナー開始に提出しなければならない。

ｂ．実技ならびに筆記試験

ピアカウンセラー養成者（指導者）養成セミナーにおける規定の時間数（ベーシックセミナー：45時間、フォローアップセミナー：15時間）の全課程を受講しなければ実技・筆記試験の受験資格はない。

評価は①エンカウンターの理解と実習、②ピアカウンセリングの理解とコ・カウンセリング実習、③地域のピアカウンセリングコーディネータとの連携、④ピアカウンセラーへの寄り添い方の４点である。実技試験は①エンカウンターの実習、②コ・カウンセリング、筆記試験は①ピアカウンセリングコーディネータや他機関との連携、④ピアカウンセラーへの寄り添い方に焦点をあてて行う。実技試験はベーシックセミナー受講中に、筆記試験はベーシックセミナー終了時に90分間の筆記試験を実施する。

ｃ．実践報告

ベーシックセミナー受講後、それぞれの各フィールドでピアカウンセラーの養成と寄り添って実践活動を行い、その活動報告を所定の様式でフォローアップセミナーまでに提出しなければならない。

ｄ．認定審査

ピカウンセラー養成者としての認定は、フォロアップセミナー終了前に、ピアカウンセイング研究所認定部門が行なう。部門では事前学習・実技試験・筆記試験・実践報告を総合して審査を行なう。なお、事前学習・実技試験・筆記試験については各々６割以上を合格とする。

ｅ．審査結果

審査結果は「合格」「保留」「不合格」の３段階とする。合格者は仮称　ピアカウンセリング研究所からピアカウンセラー養成者（指導者）の認定証が発行される。「保留」の場合には、セミナー修了証は発行されるが、保留の条件を満たした上で、再審査を経た後に認定証が発行される。

３．認定後のフォローアップ

認定されたピアカウンセラー養成者（指導者）は、仮称　ピアカウンセリング研究所の会員として登録される。

仮称　ピアカウンセリング研究所では、ピアカウンセラー養成者（指導者）に対して、定期的なブラッシュアップを行なう。

また、ピアカウンセリングを展開するにあたって、ピアカウンセラー養成者（指導者）だけでなく、ピアカウンセラー、ピアカウンセリングコーディネータともに、パワーレスに

なるときがある。そこで、仮称　ピアカウンセリング研究所では、ピアカウンセラー養成者（指導者）、ピアカウンセラー、ピアカウンセリングコーディネータ自身のエンパワーメントを高めることや全国での取り組みを会員が共有することを目的として、ピアカウンセリングのホームページを作成し、掲示板形式で全国の会員がコミュニケーションを図れる場を準備中である。

D．カリキュラム展開の実際

1．ピアカウンセリングについて

a．ピアとは

「ピア(peer)」とは、英語で「社会的、法的に地位の等しいもの、対等者：仲間：同僚」といった意味がある。これまでのピアカウンセリングは、医療・福祉領域において、「同じ障害や疾病を持ったもの同士」と解釈されていたが、ここで紹介するピアカウンセリングは、同じ障害を持つもの、同じクラスの仲間といった特定された規定の中に存在するものだけでなく、年齢が近い、出身地が同じといった広い規定の中に存在するものとの両極を含んでいる。これらの規定の中で、共通項の相互認識が行われ、お互いが仲間であると感じ、その仲間意識から、お互いを理解し、支援しようという気持ちが自然と生じるのである。これらの仲間意識は、若者など特定の年代にのみ存在するものではなく、すべての人々に存在するものであり、隠された意図や動機を持たないありのままのサポートシステムと言える。

b．ピアカウンセリングとは

ピアカウンセリングとは、人間の成長と心の健康に関する知識と共に、アクティブリスニング（積極的傾聴）と問題解決スキルを用いて、年齢、社会的地位、抱えている問題などにおいて立場が同様である人々に、ピアの意識を持って行うカウンセリングである。言い換えれば相互支援的なエネルギーを内包するピア意識の延長線上に、様々な学習や習得が可能なスキルを駆使して、相談活動を行うという方法論である。その基本前提は、人は、機会があれば自分自身の問題を解決する能力を持っている、ということである。ピアカウンセラーはその人が何を考え、どう感じているのかは本人が一番よくわかっているという立場を取る。そのために相手に何をすべきかも伝えなければ、アドバイスも与えず、解釈や診断もしない。その人自身の問題解決能力を尊重し、その機会を奪わないことに徹している。ピアカウンセラーの役割は、カウンセリーの問題を、相手に代わって解決するのではなく、アクティブリスニングと問題解決のスキルを用いて、相手が自分の考えや気持ちを明らかにし、カウンセリー自身で解決策が見出せるよう支援することである。

c．ピアカウンセリングの基本概念

基本前提：人は、機会があれば自分自身の問題を解決する能力を持っている。

基本的定義：ピアカウンセリングとは、ピア（仲間）の意識を持ち、人間の成長とこころの健康に関する知識と共に、アクティブリスニング（積極的傾聴）と問題解決スキルを用いて行なう相談活動である。

基本理念：人が最良のサポートを受けることが出来るのは、自分のエンパワメントや決断のプロセスが受け入れられ、支持される環境においてである。

ピアカウンセラーのゴール：カウンセリーに代わって問題を解決することではなく、カウンセリー自身が自分自身の問題に対して自分自身で解決策を見いだしていくことを、サポートすることである。カウンセリー自身が自分の考えや気持ちを明らかにし、あらゆる解決策や選択肢を探索するのを支援することに